

# 『神皇正統記』 試論のための基礎作業

## ——北畠親房の前半生——

我妻 建治

北畠親房、その人の思想と行動については、従前多くの先学により余うんなく論究され、とくにその著『神皇正統記』に関する論作は一々枚挙に遑ないところである。筆者がここに親房論なり、神皇正統記論なりを展開して、その人と思へに関わることは、滄海の一滴にも及ばぬことであろうこと、筆者自身誰よりもこれを知るところであり、従って筆者は、あえてこの試みをするものではない。しかし、親房六十二年の生涯を見た場合、事実としてあまりにも不分明なことが多いと言わざるを得ない。これは史料の制約ということもあるが、とくに建武政権成立前の親房、正確には元弘三年ころまでの親房、三十代後半までの

親房には、従前論及されることがあまりにも鮮少であったと言つて過言でない。言うまでもなく、人間にとって、誕生より三十代後半までの時期はいわば一個の人間の形成期であり、人生の最も重要な時期の一つであり、この時期を度外視してはその生涯、およそ、その人と思へを論ずることができないわけであるが、親房にとつてはこの前半生の人間形成期が殆んど空白に近いのである。筆者があえて親房に関わろうとするのはこの一事につきるのである。親房の前半生の空白をできるだけうめること、そして後半生の親房の思想と行動に対する理解をより深めることを目的として、取りあえず、小論では、前半生に親房がどのような

足跡を残しているか、を可能なかぎり史料を通して追求し、これを集成することとし、<sup>(1)</sup>今後の親房研究の一助ともなればと考えたのである。

小論を進めるに当たって、まず北畠氏の家柄について述べておきたい。

北畠氏は、村上天皇の皇子具平親王の子で、臣籍に降った師房（はじめ資定）を始祖とする源氏の一流である。村上源氏は、摂関家につぐ名家で、とくに師房六代の孫通親がでるに及び、「飛將軍」の異名をとる権勢をもつに至った。通親の第二子通具は堀川を称し、第三子通光は久我を称し、第四子定通は土御門を号し、第五子通方は中院の祖となるなど、一族いずれも栄えた。通方の第三子雅家が北畠氏の祖であり、親房の曾祖父となる。北畠氏は、「代々和漢ノ稽古ヲワザトシテ、朝端ニツカエ」る<sup>(2)</sup>学問によってたつ家柄であり、また、父祖三代（雅家、師親、師重）いずれも大覚寺系に近く仕え、同系三代の上皇（後嵯峨、龜山、後宇多）の御出家の際には、いずれも御供して落飾しており、さらに父祖三代いずれも正二位権大納言を極官とした家柄である。親房がそのような家運を背負い、父祖の

期待を一身に受けて生まれ、育ったであろうこと、そしてそこに彼の学問への精進を通してのみならず、「君モ村上ノ御流一トヲリニテ十七代ニ成シメ給。臣モ此御スエノ源氏コソ相ツタハリタレバ」<sup>(3)</sup>という自負心がはぐくまれたであろうことは想像するに難くない。

#### 〔註〕

〔1〕 親房に関する史料の集成に類するものとしては、横井金男『北畠親房文書輯考』（大日本百科全書刊行会）が最も網羅的で、最も代表的であるが、いずれも、文書のみであり、しかも主として親房の後半生の文書に関わるものである。前半生の文書は一通のみ。

〔2〕 『神皇正統記』後醍醐天皇条。

〔3〕 同右、村上天皇条。

#### （一）

親房は、正応六（永仁元年正月、北畠師重を父、入道左少将藤原隆重女を母として生まれた。『北畠准后伝』では二十九日。）

前半生の親房の足跡は、位階の進叙並びに官職の補任にまずあらわれる<sup>(1)</sup>。以下、それを列挙することとするが、格別の註記のない事項は『公卿補任』『弁官補任』『諸家伝<sup>(2)</sup>』または『北畠准后伝』に記されているものと了解された<sup>(3)</sup>。

正応六年六月二十四日 叙従五位下。

永仁二年正月六日 叙従五位上。

同五年二月十八日 叙正五位下<sup>(2)</sup>。

同六年五月二十三日 叙従四位下<sup>(2)</sup>。

〔無官人叙四品例<sup>(3)</sup>を開く〕

正安二年正月五日 叙従四位上。

同年閏七月十四日 任兵部権大輔<sup>(1)</sup>。

嘉元元年正月二十日 任左近衛権少将。

同年十二月十七日 叙正四位下。

同年同月三十日 任右近衛権中将。

同三年十一月十八日 任権左少弁<sup>(1)</sup>。

同年同月同日 任伊予権介。

徳治元年十二月二十二日 任左少弁。

同二年十一月一日 弁官辞任彈正大弼。

〔弁官辞任の理由は、「頼俊朝臣加弁間腹立之余<sup>(6)</sup>」とい

う。藤原頼俊が少弁、中弁を経ず、大藏卿から直ちに右大弁に任ぜられたことに対して立腹の結果だとい<sup>(7)</sup>う。十五歳の少年のこの行動の中に、後に『職原抄』を著した親房の面目がうかがわれる。〕

延慶元年十一月八日 叙従三位。

同三年三月九日 叙正三位。

同年十二月十一日 任参議。

応長元年正月十七日 兼任左近衛権中将。

同年三月二十九日 止弼兼備前権守<sup>(7)</sup>。

同年七月二十日 任左兵衛督補檢非違使別当。

同年十二月二十一日 任権中納言。

正和元年三月十五日 止督別当。

同年八月十日 叙従二位。

同四年四月十七日 止権中納言。

〔親房は祖父師親の嫡子ということになっていたための重喪によるとい<sup>(8)</sup>う。〕

同五年正月五日 叙正二位。

文保二年十二月十日 権中納言還任。

元応元年八月五日 任中納言。

同二年十月二十一日 補淳和院別当。

元亨二年四月五日 兼任右衛門督補檢非違使別當<sup>(9)</sup>

同三年正月十三日 任權大納言。

同年五月 補獎學院別當。

(淳和・獎學院別當は、源氏の第一人者が補せられるべきものとされるが、親房がこれに補されるについては格別の子細があったといふ<sup>(10)</sup>。)

同年六月十五日 按察使兼任<sup>(11)</sup>。

正中元年四月二十七日 任大納言<sup>(12)</sup>。

(父祖の極官を超えて累進した。)

同二年正月七日 補内教坊別當。

元徳二年九月十七日 出家<sup>(13)</sup>。

(かねて養育中の後醍醐天皇第二皇子世良親王の薨去に殉じたものという。)

以上が、親房の官位叙任についての足跡の概要である。

親房の官人としての昇進は極めて順調であり、一時祖父師親の薨去が、あるいはその将来を決定づけるかの感をおぼせにせよ、文保二年、後醍醐天皇の踐祚をみるに及んで権大納言に還任され、正中元年には、父祖の極官を超えて大納言に昇任するに至っている。大納言は、三公につぐ要職で、当時は洞院公賢と二人のみであった。このよ

うな、いわば破格の昇任は、親房その人の能力の然らしめるものではあったろうが、後醍醐天皇の人材登用の施策とも無関係ではなかったであろう。親房にとって、この昇進の過程並びに結果は、官人としての一層の成長をもたらしたものと想像される。しかし、このような親房の活躍も、世良親王の薨去によって突然終末をつける。親房は、「我が世つきぬる心ちして」これに殉ずるのである。法名宗玄、のち覺空。時に三十八歳であった。その後、元弘三年に至る三年間、彼は歴史の表面には直接あらわれない。ただ往時をしのぶ人の話柄のなかにのぼることはあった。元弘元年三月六日、十四歳の長子顕家が、後醍醐天皇北山第への行幸の際、そこにおいて蘭陵王を舞い、賞を賜われることがあったが、そのとき「この陵王の宰相中将君(顕家)ハ、この比世におしみきこえ給ふ入道大納言(親房)の御子そかし、かたちもいたいけしてけなけに見え給に、此道にさへ達し給へるありかたき事也<sup>(14)</sup>」等々。しかし、この三年間、親房の行動は史料的に全く不明である。この間、元弘の変の勃発、天皇の隠岐遷幸、鎌倉幕府の滅亡等、世間はめまぐるしい転回を示した。やがて中興政府の成立、そして吉野南朝の幕あけとともに、親房は再び姿をあらわす

のである。

親房のここでの前半生とはこの時期までを言うのである。

〔註〕

- (1) 年譜としては、山田孝雄「北畠親房卿系譜略」(『神皇正統記述義』附録、所収)、久保田収「北畠親房公年譜」(平泉澄編『北畠親房公の研究』所収)等が詳しい。
- (2) 「正五位上」に叙せられた事実は『公卿補任』その他に見えない。おそらく越階であろう。
- (3) 『師守記』貞和三年三月廿七日条。
- (4) 『師守記』同日条にも見える。
- (5) 『公秀公記』同日条には十六日、『准后伝』には十二月三十日、『弁官補任』には六日、『師守記』は廿六日。
- (6) 『弁官補任』にはこの記事なし。
- (7) 『園太暦』同日条にもあり。
- (8) 『公衡公記』同日条にもある。
- (9) 『花園天皇宸記』元亨二年四月七日条、『師守記』貞和元年十二月六日条にもある。
- (10) 『中院一品記』暦応三年八月十六日条。

「一、淳和天皇兩院別当事(中略)北畠源大納言入道親房、先御代雖補之、於其段者有子細。其故者对于入道及種々懇望、以別儀可被優恕之旨申之間、別執申了。彼状等分明也。(下略)」

- (11) 『花園天皇宸記』、『師守記』康永四年六月廿二日条には十六日。

- (12) 『花園天皇宸記』同日条、『後光明照院関白記』同日条のみにあり。

- (13) 『尊卑分脈』、『増鏡』卷十五、『太平記』等にもあり。

- (14) 『増鏡』卷十五。

- (15) 『舞御覽記』。

(二)

次に前半生の親房の足跡は、朝廷儀式への参仕、上皇・法皇の御幸への供奉、また法会・御会への参仕等、官人としての行動に認められる。この事実は、時期的には、親房の任官、当然ながら、とくに弁官に任ぜられた頃から史料的に多く散見できる。以下、年代順に列記する。

嘉元元年正月四日 亀山法皇の二条殿への御幸に供奉。<sup>(1)</sup>

同年同月六日 後宇多上皇の常磐井殿への御幸に供奉。<sup>(2)</sup>

同四年正月一日 後宇多上皇の御所年始の儀に参仕。<sup>(3)</sup>

同年同月十五日 龜山法皇御月忌の御幸に供奉。<sup>(4)</sup>

同年四月 平野祭、梅宮祭月次祭に参仕。<sup>(5)</sup>

同年六月 同右大祓に参仕。<sup>(6)</sup>

同年九月十二日 後宇多上皇結縁灌頂嚴修のため、龜山殿への御幸に参仕。<sup>(7)</sup>

徳治二年五月十二日 後宇多上皇供花結縁のため、長講堂への御幸に供奉。<sup>(8)</sup>

同三年正月二十六日 後宇多法皇仏法灌頂をうけられるため、東寺への御幸に供奉。<sup>(9)</sup>

同年八月十九日 章義門院殿上始に昇殿。<sup>(10)</sup>

延慶四年正月三日 花園天皇御元服に際し、慶を奏上。<sup>(11)</sup>

同年同月七日 白馬節会、御元服に賀表を奏上。<sup>(12)</sup>

同年同月十日 伏見、後伏見両上皇、永福、広義両門院法勝寺への御幸に供奉。<sup>(13)</sup>

同年二月五日 釈奠宴穩座に参仕。<sup>(14)</sup>

同年三月二十五日 後伏見上皇皇女御行始に供奉。<sup>(15)</sup>

同年同月二十七日 縣召除目の儀に参仕。<sup>(16)</sup>

同年六月十五日 後伏見上皇皇女<sup>(17)</sup>、内親王宣下に参仕。<sup>(17)</sup>

同年閏六月三日 花園天皇土御門殿への御方違行幸に供奉。<sup>(18)</sup>

同年八月十二日 西園寺公衡別第の堂供養に参仕。<sup>(19)</sup>

正和二年正月九日 政始に際し、上卿。<sup>(20)</sup>

同年二月七日 釈奠に際し、上卿。<sup>(21)</sup>

同年同月十二日 日時文奏上。<sup>(22)</sup>

同年同月十七日 国忌に際し、上卿。<sup>(23)</sup>

同二年三月十一日 賀茂別雷社及傷殺害の事により、軒廊御卜に参仕。<sup>(24)</sup>

同年四月二十六日 解陣に際し、上卿。<sup>(25)</sup>

同年五月二十八日 小除目の儀に際し、上卿。<sup>(26)</sup>

同年六月十三日 八幡社軒廊御卜に参仕。<sup>(27)</sup>

同年七月五日 広義門院御産御祈七仏薬師法初日に際し、上卿。<sup>(28)</sup>

同年同月九日 後伏見上皇皇子御降誕の御儀に参仕。<sup>(29)</sup>

同年八月六日 後宇多法皇高野山御幸に供奉。<sup>(30)</sup>

同年十二月二十六日 任大臣節会に参仕。<sup>(31)</sup>

同三年四月四日 後醍醐天皇、権僧正性守をして前大僧正尊教の譲りに任せ、妙法院門跡相承の所職並びに莊園坊舎等を相伝せしむ。親房奉行。<sup>(32)</sup>

文保二年二月二十一日 後醍醐天皇踐祚に先立ち、御文書等御文庫搬入に従事。<sup>(33)</sup>

同年同月二十三日 立坊定の儀に参仕。<sup>(34)</sup>

同年同月二十七日 後醍醐天皇に、清凉殿に拝謁。<sup>(35)</sup>

同年三月四日 後醍醐天皇禁中諸殿歴覽に供奉。<sup>(36)</sup>

元応元年十月二十六日 神護寺に灌頂小阿闍梨を置くにつき、親房奉行。<sup>(37)</sup>

同二年三月十三日 御八講参列。<sup>(38)</sup>

元応三年正月十四日 後宇多法皇石清水八幡宮御幸に供奉。<sup>(39)</sup>

元亨三年六月二十日 作文御会及び御遊に参仕。笙の役を勤仕。<sup>(40)</sup>

同年十月十一日 安樂光院阿弥陀講に参向。笙の役を勤仕。<sup>(41)</sup>

正中元年正月十五日 持明院殿作文御会に参仕。<sup>(42)</sup>

同年同月十九日 中殿詩御会及び管弦御会に参仕。笙の役を勤仕。<sup>(43)</sup>

同年同月同日 恒貞親王持明院殿御参行に扈從。<sup>(44)</sup>

同年同月二十二日 和歌御会始に参仕。<sup>(45)</sup>

同年八月二十二日 龜山院皇子、聖護院順助法親王の室

に入られるに当たり、扈從。<sup>(46)</sup>

同年同月二十六日 後醍醐天皇より常御所において唐物等五種下賜。<sup>(47)</sup>

同年十二月十四日 後醍醐天皇、東寺仏舍利を奉請せられるにより、親房も二粒を奉請。<sup>(48)</sup>

同二年七月七日 七夕和歌御会に候じ、詠歌。<sup>(49)</sup>

同年九月九日 上卿として小除目の儀に参仕。清書の役を勤仕。<sup>(50)</sup>

(同年カ) 十月九日 東寺領太良庄の訴により、国衙濫妨の由を国司に尋問の旨、親房自筆をもって真光房に伝う。<sup>(51)</sup>

同年十一月十八日 東大寺の訴により、親房をして薬師寺の大和美濃庄内田地濫妨の子細を尋ねしむ。<sup>(52)</sup>

同三年二月七日 後醍醐天皇、東寺仏舍利を奉請せられるにより、親房も一粒奉請。<sup>(53)</sup>

同年三月十八日 寂勝光院を東寺に寄付されるにより、親房上卿として勤仕。<sup>(54)</sup>

嘉暦元年九月十七日 石清水八幡宮護国寺焼亡により、因幡守源行直をして造進せしめる旨、親房、上卿として宣下。<sup>(55)</sup>

同二年三月二十四日 縣召除目の執筆勤仕。<sup>(56)</sup>

同年九月一日 春日神木木津遷座中、議定に出仕。<sup>(57)</sup>

同年十月二十六日 後醍醐天皇、法勝寺大乘会臨幸に際し、上卿として勤仕。<sup>(58)</sup>

同三年七月八日 後醍醐天皇、東寺仏舍利奉請により、

親房奉行。<sup>(59)</sup>

元徳二年正月五日 叙位の執筆勤仕。<sup>(60)</sup>

同年二月二十三日 中殿和歌御会に参仕、序を執筆。<sup>(61)</sup>

親房が政界の第一人者として、あるいは上卿、あるいは廷臣として、叙位・除目の執筆、清書、賀表の奏上、政務に関する奉行等に従事し、また朝廷儀式への参仕、法皇・上皇の御幸への供奉、法会・御会への参仕等諸般にわたって尽瘁した事実をここに認めることができる。これらの事実は、史料的に認められるものの一部にすぎないから、史料として現在みることのできないものを含めれば、さらに増加されるであろう。ともあれ、以上列記した各項のうち、朝廷と東寺との関係、後醍醐天皇親政下の莊園所職の決裁など興味を引く事実があるが、親房その人との関連において、とくに注意されるのは、(イ) 天皇・法皇・上皇の御幸への供奉、(ロ) 法会・御会へ参仕の記事である。す

なわち、(イ)に関連して想起されるのは、長子顕家が戦死を前にして、延元三年五月十五日、後醍醐天皇に奉った上奏文の中の一文である。

#### 可被閣臨時行幸及宴飲事

右帝王所之、無不慶幸。移風俗救艱難之故也。世莅漢季民墜塗炭。遊幸宴飲誠是乱国之基也。一人出時、百寮卒從。威儀過差費以万數。況宴飲者鶴毒也。故先聖禁之、古典誠之。(中略)今還洛都再幸魏闕者、臨時遊幸長夜宴飲堅止之深禁之。(下略)

顯家は、正中二年、八歳にして侍從に任ぜられて以来、元弘三年までの八年間、官人として宮廷行事に参仕したから、宮廷行事の御幸の意味を「帝王所之、無不慶幸云々」とはしているが、元弘三年から延元三年の戦死まで「武ヲカネテ蕃屏」として五年間過した奥州での生活は、彼をして、どうしても右の上表として発露しなければやまぬ精神的状況に立ち至らせたものと考えられる。この上奏文の中に「神皇正統記の姿を発見する」とする意見があるが、顯家は親房と一ではないのである。このことは、正平七年、南北両朝の間に一時的小康を得たいわゆる正平和議の際にとった親房の入京の様子に如実に示されている。入京の親



房の「華着ケタル大童子ヲ召具シ、輦ニ駕シテ宮中ヲ出入スベキ粧、天下耳目ヲ驚カセリ」の表現に、その現実はなれしたさまとともに、東国に転戦しながらも色濃く残されている前半生における宮廷生活の投影をここにみることができるのである。親房にとって「帝王所之」は文字どおり、「無不慶幸。移風俗救艱難之故」であつたのであり、頭家とは一でなかつたのである。

次に(ロ)に関連して注意される事実は、和歌御会や管弦御会への参仕のそれである。親房が和歌をよくした事実は、その著に『古今集序註』のあることからもうかがわれ、また、『続千載和歌集』、『続現葉和歌集』、さらに『新葉和歌集』や『李花集』に収載された詠歌からもうかがわれるところである。親房にとっては、「諸道・諸芸ミナ要枢」であり、和歌も国を治める道であつたのである。また、御会において親房は笙の役を数度勤仕した史料的事実がある。笙をよくするということは何もそれが当世風の名人上手という意味ではなく、一つの楽器に習熟することが当時の公卿の教養として不可欠のことであつたことにもよるものであろうが、親房にとっては「金石絲竹ノ楽ハ四学ノ一ニテ、モハラ政ヲスル本也。今ハ芸能ノコトク思ヘ

ル、無念ノコト也<sup>(67)</sup>」として展開される律呂論にみえるごとく、笙も、和歌同様、いわば政の本であり、彼にとっては懸命のものであつたのである。正中二年、親房が内教坊別に当に補されたことも意味ある事実といわねばならぬ。以上、親房の前半生における足跡を史料を通して追つてみたのであるが、詠歌を除いては、ここには、彼の生まな思想、感情の表現と認められる事実は殆んど存しない。この限りにおいては、後半生における著述を通して、いきおい推論に推論を重ねる以外に方途はないのである。

〔註〕

- (1) 『上怙芸御幸記』(『三条記』) 同日条。『公秀公記』同日条。
- (2) 同右、同日条。
- (3) 『公秀公記』同日条。『行類抄』同日条。
- (4) 『上怙芸御幸記』同日条。
- (5) 『洞院家記』。
- (6) 同右。
- (7) 『嘉元四年結縁灌頂記』同日条。『繼塵記』同日条。
- (8) 『上怙芸御幸記』同日条。

- (9) 『法皇御灌頂記』、『隆長卿記』 同日条。  
 (10) 『公秀公記』 同日条。  
 (11) 『花園天皇宸記』 同日条。『大外記中原師右記』 同日条。  
 (12) 『花園天皇宸記』 同日条。『繼塵記』 同日条。『大外記中原師右記』 同日条。  
 (13) 『繼塵記』 同日条。  
 (14) 『園太曆』 同日条。  
 (15) 『繼塵記』 同日条。  
 (16) 『園太曆』 同二十七・二十八・二十九日条。  
 (17) 『公秀公記』 同日条。  
 (18) 『公秀公記』 同日条。  
 (19) 『公秀公記』 同日条。  
 (20) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (21) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (22) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (23) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (24) 『師守記』 貞治二年二月十五日条裏書。  
 (25) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (26) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (27) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (28) 『花園天皇宸記』 同日条。
- (29) 『公秀公記』 同日条。  
 (30) 『御宇多院御幸記』、『仙隣記』 同日条。  
 (31) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (32) 『妙法院文書』。  
 (33) 『繼塵記』 同日条。  
 (34) 『繼塵記』 同日条。  
 (35) 『繼塵記』 同日条。  
 (36) 『繼塵記』 同日条。  
 (37) 『神護寺文書』二。  
 (38) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (39) 『花園天皇宸記』 同日条。『洞院部類記』 同日条。  
 (40) 『花園天皇宸記』 同日条。『鉢元抄』、『御遊抄』、『増鏡』。  
 (41) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (42) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (43) 『中殿御会部類記』、『御遊抄』 同日条。  
 (44) 『花園天皇宸記』 同日条。  
 (45) 『後光明照院関白記』 同日条。  
 (46) 『後光明照院関白記』 同日条。  
 (47) 『後光明照院関白記』 同日条。  
 (48) 『東寺百合文書』ヤ一之三十五。『仏舍利勘計記』 同日条。

- (49) 『臨永和歌集』。
- (50) 『後光明照院関白記』同日条。『統史愚抄』同日条。
- (51) 『宮内庁書陵部所蔵文書』(『北畠親房文書輯考』所収)。
- (52) 『東大寺文書』第二回採訪三。
- (53) 『東寺文書』、『仏舍利勘計記』。
- (54) 『東寺百合文書』と四十九之五十四。
- (55) 『石清水文書』一。『護国寺供養記』同日条。
- (56) 『叙位除目執筆鈔』。
- (57) 『師守記』貞和元年四月廿二日条。
- (58) 『園太曆』康永四年七月十六日条。『体源抄』、『公卿補任』、『准后伝』。
- (59) 『東寺百合文書』き一之三十七。
- (60) 『叙位除目執筆鈔』、『愚管記』十三。
- (61) 『御遊抄』、『増鏡』卷十五。
- (62) 『三宝院文書』七十。
- (63) 『神皇正統記』後醍醐天皇条。
- (64) 岩佐正「神皇正統記解説」(『日本古典文学大系』)。
- (65) 『太平記』卷三十。
- (66) 『神皇正統記』嵯峨天皇条。
- (67) 同右。

### (三)

次に親房の前半生において見落すことのできない事実  
に、彼の公卿としての改元の儀への参仕がある。

一体にして、改元は天皇の大権として、武家幕府の時代  
にも朝廷に保留された権限であった。いわば朝廷の大事で  
ある。古くは祥瑞の出現を喜び、前途の繁栄を願って改元  
しているが、平安時代以降は識緯説による辛酉、甲子の改  
元と、天災や疫病などをはらい除くための呪的意味を重ん  
じた改元とに変わる。年号の文字は式部大輔、文章博士ら数  
名の学者によって二、三の候補が「勘文」として提出さ  
れ、公卿はこれに対し、賛否の意見、いわゆる「挙」「難」  
を陳べ、最後は天皇の決裁によって決められ、詔書をもつ  
て公布される。典拠の書は周易、尚書、礼記、毛詩、論語  
などの経書を主とし、史書や文集に及ぶ。二字を選ぶのが  
普通である。

親房が参議に任じてから出家するまでの間の改元は、応  
長、正和、文保、元応、元亨、正中、嘉暦、元徳の八度を  
数える。親房は、いずれの場合にも参仕したと想像される

が、この儀に参仕したものととして史料的に明白に認められるのは、左の五度である。

- (1) 延慶四年四月二十八日改元。応長。依疾疫。  
大輔菅在輔 博士同在登 藤資名右少弁  
前権中納言藤俊光 勘解由長官菅在兼  
文保三年四月二十八日改元。元応。依代始。  
大輔菅在輔 博士菅在登 藤原資朝右中弁  
前権大納言藤原俊光 前民部卿菅在兼  
元応三年二月二十三日改元。元亨。辛酉。  
博士藤原資朝 菅原家高  
(4) 正中三年四月二十六日改元。嘉暦。依天災地震疾疫。  
大輔藤藤範 権大納言菅在登  
博士藤行氏朝臣 同家倫朝臣  
大学頭菅家高朝臣  
(5) 嘉暦四年八月二十九日改元。元徳。依疾疫。  
大輔菅原在登 博士藤原行氏 菅原在淳  
(A) (右の人名は勘文を上進した学者名である。)
- (1) 延慶四年四月二十八日改元。(2)

延慶四年を応長元年と改めることについての儀は、疫病をはらう意味においてであった。勘文は菅原在輔以下五人の学者によって五通提出され、上卿藤原師信以下公卿八人によって審議された。その審議の経過についてはこれを史料的に追うことができないが、結局、応長の年号が選ばれたのである。ハイティーンのの親房は、末座の参議としてこれに参仕した事実を認めることはできるが、しかし、ここにおいては彼の格別の言行を史料的に指摘することができない。

- (2) 文保三年四月二十八日改元。(3)

この改元は、後醍醐天皇の践祚に伴う代始によるものであった。菅原在輔、日野資朝ら五人の学者による五通の勘文が提出された。これらの勘文のなかには正慶、元応、建文、大定、延文、康永等の文字のあったことが史料的に確認できる。この儀の群議に参加した公卿は左大臣藤原実泰以下、権中納言親房を含めて、十二人を数えることができる。再三にわたる審議の後、年号は元応と正慶の間で決められることとなり、奏請の結果、文保三年を改めて元応元年とすることとなった。このとき親房は当初より元応を主張した事実を認めることができるが、その審議の過程な

り、元応主張の根拠を跡づけることには史料的に制約がある。

(B)

(3) 元応三年二月二十三日改元<sup>(4)</sup>。

この改元の儀は、前二回のそれと比較して、史料的により精細にこれを見ることができるとのみならず、前半生の親房の言行を知る上に最も豊かな内容を提供している。参仕の公卿は、太政大臣藤原通雄、内大臣同師信、権大納言同定房、春宮大夫同公賢、大宰権帥同実香、中納言源親房、前権大納言藤原宣房、中宮権大夫同師賢、参議彈正大弼同実任、大藏卿同冬定、左大臣同公明の十一人であり、ここには、当代一流の公卿の言行が網羅され、極めて興味深いものとなっている。

この改元の儀においては、公卿の間で白熱した議論が展開された様子がうかがわれる。議論の紛糾した原因の一つは、元応三年が干支辛酉に当っており、そこで、辛酉革命という識緯説をどう考えるか、という点であった。すなわち、識緯説によると、干支辛酉は革命、同甲子は革命の年であって、国家に大變の起るときである。君主はこれを未

然に防ぐために、年号を改めて天意に従わなければならないとする。醍醐天皇のとき、文章博士三善清行がこれを進言し、昌泰四年辛酉が延喜元年と改元されて以来、この識緯説による改元が原則として踏襲されて来ていたからである。親房の生まの言行もここに明確に示されることとなった。

この改元の儀については、まず『花園天皇宸記』によってこれをうかがうことができる。

廿三日丁卯 晴今夜辛酉伏議云々、左大臣依神木事不参、内大臣為上卿云々、太政大臣、内大臣、権大納言、定房、春宮大夫、中納言、親房、大宰権帥、前中納言。

廿四日戊辰 今日未剋伏議了云々、兼日不可有改元之由風聞、然而猶有議改元云々、元亨之由治定云々。

廿五日己巳 陰雨降、今日伝見伏議定文、太政以下数輩、面々振才学之間、申詞每人数々、伏議自戌剋事始、翌日未一点事了云々、伝聞、公明有勅禄、文台被置易、摺本云々。弘長以後毎度事歟。(句点は『史料大成』による。)

花園院は、改元の儀について、参仕の公卿いずれも「振

才学之間」二十三日戌刻から翌二十四日未刻に及んだと言っている。花園院は二十五日になってはじめて『伏議定文』を見たとしている。この「定文」はおそらく「諸道勘申今年辛酉当革命否又可被行何等事哉事」をタイトルとして始まるもので、今日後半が欠けているので、その全文を知ることとはできないが、参仕の公卿十一人のうち、実任、冬定、公明三人を除く八人の意見をここに十分に認めることができるものである。これらは、いわゆる後三房、公賢、師賢らを含む当代一流の知識人の言辞である。

この『伏議定文』によって公卿の議論をみると、辛酉革命に対して、論点は三つにしろれたと考えられる。(1) 識緯説をどう考えるか、(2) (1)に基づいた三善清行以来の辛酉革命をどう考えるか、(3) (1)(2)とは関係なしに同年に改元そのものを行なうべきか否か、という諸点であった。そしてこれに対する参仕の公卿の大方の意見としては、識緯説(これについては諸公卿は緯候之説、識芥之邪、漢国幽微之説、符命、識記、圖書、易緯文、易詩両緯、緯候之書、緯書等の文字を使用している)は、(1)聖人の旨ではないこと、従ってこの説はさしたる根拠のあるものではないこと、(2) 緯説に基づく辛酉革命論も根

拠のないものであること、従って三善清行以来の説はとるべきものがないこと、よしんば辛酉革命をとったとしても元応三年辛酉は大変の期年には当たらないこと等々であった。しかし、(3)の改元そのものを行うべきか、否かについては区々に分れるところがあった。すなわち、師信は、「縦相当其変、美行聞天者非可驚、縦不会其災、政教背時者尤可恐哉」と言い、緯説を、「非聖人之旨、強拾彼狂誕不可補彝倫」、「辛酉革命之条、非皇王之所序」として否定し、改元そのものについては「不可交勘漢家之異説」として、結局外記例に任せて改元すべしと結論した。定房は、「辛酉之年、革命之義經史之中未見其文」とし、「識芥之邪不載叡心、殊本中和之徳可被行王道正乎」と識説を否定しながらも、「安而不忘危者先哲之格言也」として改元を主張した。公賢も「何闇日域根元之義可求漢国幽微之説哉」としながらも、「居安慎危者君子之遺美也」として、改元のことは外記の例に任せて行うべしとした。実香も、「居安不忘危者、聖代之嘉模也」として前記と同様であった。ここに見られる「先哲之格言」「君子之遺美」「聖代之嘉模」とは、周易繫辭伝の文辞の意である。宣房は、「情思緯候之書偏遠聖人之道」とし、「人道之外依天之曆数、更

不可定吉凶之運、天道非外依人事、応感能可被申文明之徳歟、偏施日新之徳化、被呈世治之功績者、有何所畏哉」  
「縱雖改年号、无其徳者易民之聴耳従、縱雖因旧号、従其道者協天之意幸甚」とし、「此上事任外記勘申」としている。  
師賢の發言は、その後半が欠けているので明白でない。

諸公卿の發言のうちで、親房のそれは、左の如く極度に易文を驅使した最も長文のものであった。

親房卿  
中納言源朝臣定申云、推本朝神武之薨首、勘七元三變之年紀、第二薨之内第四二六已過、第二四六未至云々、勘文要枢大概不過之歟、於漢家之積年諸道之異説者、各有所抵牾、弥難分涇渭、凡聖人之治、天下必自人道始、興衰治乱在于徳不在于天、聞于人聞神之故也、而儒家仍述符命之事、不本徳政、云道豈非刻鵠之者為驚哉、後漢書曰、人情忽於見事、貴於異聞、觀聖王之所記述、以仁義正道為本、非有奇怪虛誕之事、今諸巧惠小材伎数之人、增益圖書、矯称讖記、可不抑遠之哉云々。(歟)説之謂之、如清行朝臣密奏者、見幾而假事、古之王孫滿之流歟、非垂將來之法哉、師緒疑申之旨、又以雖非不審、依不侗律候、不及擊蒙、但辛酉之年有變革之慎否、猶勘經史可有沙汰歟、粗案易象曰、運之代謝所物之造化、惣是六甲

一元之間、日々月々無不革之道、然而五絶不協者失變易之序、三支不正有悔咎之象、若夫大歲在辛酉、念氣用事金火相剋革无甚於焉、是以君子内省脩徳改過、自新非有白狼御釣青龍負図之兆哉、抑堯有敢諫之鼓、舜有誹謗之木、湯有思過之史、武有戒慎之銘、是皆聴之、无形察之未有庶下情之達上、々情之无私者也、今開讖言之路、被諂攘災之計、此已劉彫為朴之日、順天応人之春也、須久於其徳、合元亨利貞之象者歟、而代々之例每迎此年、必改元号訪之、異朝列漢以來至于李唐、辛酉之年一十九廻、斯中七箇改元、改在当年、蓋自然之符契也、理之所推不可必然、體元居正者何勞改元哉、於今度者專温卦象之意、可復淳素之風、古之天下者今之天下也、欲執大象、不如无邪、就中鼎新之卦、義在于享飪、不虚心者難養賢、不措枉者難舉直、雖膏不食方虧悔是也、又革之九四者變之、既濟韓康伯以為行過恭礼過儉可以矯世、厲俗有所濟王卦之意道之至要也、吁咸當時自天祐之吉无不利矣、(句点是筆者)

親房は、まず「凡聖人之治、天下必自人道始、興衰治乱在于徳不在于天」、「觀聖王之所記述、以仁義正道為本、非奇怪虛誕之事」とし、「而儒家仍述符命之事、不本徳政」

「増益圖書、矯稱識記、可不抑遠之哉」として識記を否定し、辛酉革命に関連して「運之代謝所物之造化、惣是六甲一元之間、日々々々無不革之道、然而五絶不協者失變易之序、三支不正者有悔咎之象」として時・物の生成流転の本源の相を証し、「徳政」をもつて「聖人之治」の基本とする<sup>(7)</sup>とされる、いわば宋学的立場にたつて革命を否定した。親房が、このように讖緯説を批判したのであるが、この批判の事実については、従前この「定文」を引いて多くの先学により指摘されるところがあつた。<sup>(8)</sup>しかし、親房は次に易文を引いて議論を展開したが、その易論についての先学の指摘は殆んど見るべきものがないと言える。すなわち、親房は、さらにここで天人感應を論じて、まず易の乾卦にみえる最も純粹な陽、最高に健なるものの象徴たる元亨利貞の象を示したのである。改元については「昧元居正者何勞改元哉」として辛酉による改元を否定し、姿勢を正して、「於今度者、專溫卦象之意、可復淳素之風、古之天下者今之天下也」として、易の鼎卦並びに同象伝、革卦、既濟卦、大有卦等を引用して最も安定した象に基づくべき旨を論じたのである。すなわち、ここには改元のみならず、時間、歴史、政治、社会における卦象の意に基づく健

なるものの実現のしかた、その姿勢、いわば卦象の意に基づく世界觀的立場を明確に打ち出しているのである。親房の易は「變易」を主とするものであつたと言えよう。従つてこれは、親房の易についての知識、易を中心とした思想を考へる上での好史料を提供していると言えよう。ちなみに、周易は、令制下大学寮の經学七經の一つとして古来最も重要視されて來た書物であるが、いつのころからか、またなぜか、五十歳以前にこれを読むと不吉である<sup>(9)</sup>とされた時代のある、いわくつきのものであつた。親房が周易を読んでいたであろうことは、別に『神皇正統記』の本文の中からその文辭を摘出することは可能なのであるが、右に述べられるような親房の易についての考え方は、周易そのもののからの知識によつてのみ構成されたものなのか、あるいは、程朱の学、いわゆる宋学を通した易理解の上に立つたものであるのか、このことだけでは判然としない。すなわち、親房は、易を卦、象、象、文言伝等を卦に附屬した形で讀んだのか、あるいは卦と分離されたいわば別本として讀んだのか。親房が玄恵の高弟として宋学の奥を極めたとする説は一条兼良の『尺素往来』に見えるところであるが、この記実は必ずしも確証のないところであり、むしろ



その確証は右の「定文」の詳細な分析と『正統記』の易思想からの再評価を通して、これを鮮明することができるかも知れぬ。また『花園天皇宸記』の前記二十五日の条に、改元の儀と関連して「被置易擢本」とあるが、これが、あるいは周易の宋版本であるかも知れないことは、「擢本」の文字の当時の使われ方から考えると、それとして十分評価に価することであるかも知れない。

ともあれ、この「定文」によって、辛酉革命論は紛糾し、のみならず、改元の議論も区々に分れた様をうかがうことができる。かくて、この件は後醍醐天皇の決裁によって改元すべきこととなったのである。これ以降の審議の様子は、記録者が不明であるが、『改元部類』『不知記』の中にこれを認めることができる。次に、年号勘文とともにそれを挙げる。

文章博士資朝朝臣。

元亨。周易曰。其德剛健。

天成。左伝曰。見上。

康永。金鏡字。見上。

文章博士家高朝臣。

応安。毛詩正義。見上。

弘元。後漢書。見上。

康永。金鏡字。見上。

(前略) 諸卿議奏不同。然而猶可被行改元歟云々。貫首卿出於奥。仰内府云。可有改元。令文章博士藤原資朝朝臣。菅原家高朝臣等勘申年号字。次内府移端座。權中約言師賢卿此内被起座。父子之礼也。内府座定之後。師賢卿被加着奥座。召官人令敷帑。次召大外記師緒被仰云。可有改元。令文章博士藤原資朝朝臣。菅原家高朝臣等。勘申年号字。次頭武衛資朝朝臣就帑。被下年号勘文二通。加一懸紙。兼被召儀云々。次内府披見之後。被下勘文於位次公卿。諸卿次第被見下勘文。大丞閣筆被見勘文。見了返上。参議冬定卿。依内府命読申年号勘文。次大丞又閣筆。被定申年号字。次第定了。内府招頭武衛於帑。被奏人々挙申字。

内府。元亨。吉田大納言。元亨。春宮大夫弘元。帥。元亨。弘元。

源中納言。元亨。万里小路前中納言。元亨。応安。中宮權大夫。

弼宰相。元亨。弘元。大藏卿。元亨。左大弁宰相。康永。弘元。

次頭武衛帰出仰曰。一揆之後。重可被申云々。次重有群議。元亨弘元間。重々及沙汰。不能委記。次被奏元亨一揆之由。次武衛参仙洞院奏云々。武衛帰出仰之。緯候書

非聖人之道之上。可為用神武上元者。不当革命之運歟。

然而謹慎之余。改元応三年可為元亨元年之由。令作詔書  
与云云。(下略)(句点は『続群書類従』巻二百八十一に  
よる。)

かくて、諸公卿は、勘文に基づいて年号字を挙申した結果、元亨、弘元二案が多数を占め、さらにこの二者から一者を選ぶこととなり、「挙」「難」が陳ぜられ、最後は勅裁によって元亨と決せられたのである。右記録によると、元亨改元は、勿論辛酉革命によってではなく、そして「緯候書非聖人之道之上」緯説によるものでもなく、「神武上元」を用い、「謹慎之余」であると註記している。しかし、ここには緯説の深く投影されていることは蔽うべくもない。親房は、当初よりこの排除を主張し、年号字も、終始元亨を挙申している記実を見ることができ。

この間、右の年号字について、元亨、弘元二者の間で賛否の論議が行われたのであるが、この様子は『師賢卿記』<sup>(13)</sup>二月二十三日条にこれを読みとることができる。左に煩をいとわず、その大要を挙げる。

(前略) 将又元亨弘元両号間。可令一同歟。春宮大夫為早速。此両号可有沙汰之由被申之。仍弘元不挙申人々。可申難之由被仰之。然而面々無言。従見遣参議方。此事

太無故実也。加難之時一切不審次第也。今夜在座公卿等。多是父祖不接群議之席。暗于家記迷于庭訓人々也。仍皆以如此歟。良久前納言遂申云。弘元不挙申所存云。

弘字有弓作。太不便。且弘仁有乱。寛弘代末也。

此雖太不

無兵亂。以代本号可假難。有弓作字如何。僕依有所思不申此子細。

凡依辛酉被改元号。先此字殊有

憚。如昌泰清行朝臣奏状者。二月建卯時動干戈云々。又革

者兵革也。辛酉配革卦。而當此年用有弓作之字之条。旁

不可然云々。春宮大夫云。弘字事。挙申人面々定有所存

歟。然而於我者此字外不挙他号。仍先可陳申也。依辛酉

改元用弘字。不快之由被申条。一旦誠難可然。龜山院改

元応二年為弘長元年。是辛酉年也。彼年全無兵革之間。

聖代之例尤足因准。遠不可求例於弘仁寛弘歟。前納言重

申云。弘字有弓作之上。就元字殊有可憚之故。元者君也。

民也。上有弓作。下有民訓君釈之条。殊不可然者。弘長

之例猶難准歟。大夫重無示旨。似有存旨。僕依挙此字。

有最負之志。仍申上云。先弘仁兵革事。先々雖有其沙

汰。太不可然事也。大同有乱。改元於弘仁之後。四海八

挺。偃干戈囊弓矢。其上弘長事。春宮大夫如被申太嘉例

也。依下字可有難之輕重之条尤所存也。且先々就正字。

如一止之難。可依下字之釈之由有沙汰歟。擬此字者。長

与元之間。長字猶有憚。所以何者劍戟者短兵也。弓矢者長兵也。弓作之下有長字之条猶無便歟。然者被用弘元条有何事哉。但元亨猶無難可被用。被者不能左右。弘字所存如是。先是資朝朝臣歸出。仰可一同之由。僕暫不定申之。上卿留職事於軾給。是為令聞諸卿中趣也。職事座定之後更申之了。前納言不陳是非。彈正宰相申云。弘安又為上皇之号。曆數尤久。可謂嘉例歟。前黃門又云。弘字為避弓作之難。為方作之由。先々有沙汰歟。於方弥設其難。方者昌祚輩滿朝之方。今当君臣刻賊之期。有昌祚之疑条如何。太無便。春宮大夫云。弘字作為方之条。只今無申出之人。重及此難乎。其上於方作者。太為僻事之由。所令相存也者。爰太府卿申云。件文後漢書郎顯伝文。顯上書之詞也。而彼文云。非弘濟元々云々。是順帝陽嘉二年。在官之三公。多為巧言令色之人之間。為機被曠官。納此諫言。而弃非字之条如何。人々無陳。大略承伏。僕答曰。此事儒中定存故夷歟。於此難者勘者尤可謝之。但已舉申此字了。聞難爭不述愚存乎。引書事当座慥不覺。愚暗之至責而有余。但如天永承安者。引文隱士之文也。又弃數字者也。凡年号字。引書帝德之外。不可用之由有一說歟。然而間有不然之例。况如隱士之文尤可

憚之歟。然而彼兩度共是聖代之号也。盍相准者。太府卿重無申旨也。相台相公云。縱雖弃非字。下文太吉也。被用之条。不可有巨難歟。上卿被申云。弘字事。人々難陳大略尽子細歟。於今者元亨可有沙汰。前大納言云。亨字本朝末用之。重思異朝之例。唐高宗有感亨元号。高宗者太宗之子。守文之君也。饗国三十有四載。海內安定。天下無事。尤足比擬云々。実相公又有亨字褒賞之詞。但非指事。源納言引易文。依革命改元。亨字有便之由數剋演說。太珍重也。庸才愚心不能記尽。吉重相云。元亨舉申上者。雖不存異議。聊有憚存子細。其故者後二条院始用乾元号。彼乾字於本朝新字也。所引之書文易文也。近例旁似可憚。且後堀河院改貞元為元仁。今度改元元為元亨之条可相似。旁不快也。為之如何。人々無音。僕答曰。此難誠可然。但於新字者是非難定申。貞元元仁之例尤不快歟。但忘字在下例。天応嘉元雖為繼体之号。貞元延応相續不快也。然而龜山院代始用文応者也。一代之内舉一凶。不可弃一吉。抑我朝用新字例。近文治是也。後鳥羽院代始用元暦。第二度用文治。文治於我朝始例了。今度代始用元応。第二度用新字之条。太可謂相応。重相重無示旨。滿座不言。頗有雌伏之氣。愚者之一得歟。先是前

納言申云。代始号両字相統之例。於本朝天曆。天徳。天祿。天延。永延。永祚。天仁。天永。皆是継体之号也。今度宜准。上卿被申云。代始両字相統例。前中納言所申誠嘉例也。但近例又有可憚事。建曆年号字以近定吉凶歟。然而於今度者被用此字。太有便之由所存也。人々同之。上卿又被申云。群議大略一同歟。此上早可令奏聞。仍以弘元元亨両号被申上。又人々定申之趣。委可奏聞之旨被仰。職事資朝朝臣參御所奏聞。又參仙洞了。良久帰出。仰可為元亨之由依其年例可作詔書由仰歟。仰詞追可尋記。(傍点は筆者、句点は『統群書類從』卷二百八十五による。)

弘元・元亨両字についての論議は、弘元字から始められた。とくにその難陳の様子が詳細を極めている。第一の論点は「弘」が弓作であること、すなわち兵乱の予想されることの難である。第二の論点は弘元の引文の非字を棄てたことによる難である。とくに後者の点で注意されるのは、弘元は後漢書顕上書之詞「非弘濟元々。採用良臣。以助其化云々」は「隱士之文」として難ぜられている事実である。この難陳の理由は隱士之文にあるとしているが、これが、『花園天皇宸記』中の「近日朝臣多以儒教立身尤可然、

(中略)只依周易論孟大学中庸立義、無口伝間面々立自己之風、(中略)近日風鉢以理学為先、不拘礼儀之間、頗有隱士放遊之風、於朝臣者不可然、此是近日之弊也(下略)」の「隱士云々」と同質の意味において難ぜられているものならば、これは、「理学云々」の表現とともに、極めて注目すべきことと言わねばならぬ。

次に元亨字についての論議であるが、元亨字は周易大有卦彖伝中「其徳剛健」から引いたものであった。(6)師賢は、親房が挙申について、易文を引いて教剋演説し、元亨を主張したとし、その様子を、「庸才愚心不能記尽」と記している。元亨の難陳の主要な点は定房の意見に見られる。一は亨字は新字の例であること、二は易文を引いていることであつた。とくに後者について、易文を引くことがどうして難に当るか、は明らかにしていないが、もし、事実それが難として理解されているならば、当時における易の位置の面から注意しなければならぬ事実である。

以上が、元亨改元についての改元の儀のあらましであるが、ここ以前半生の親房の言行をかなり明白に指摘できると言わねばならぬ。

(C)

(4) 正中三年四月二十六日改元。<sup>(16)</sup>

これは疫病をはらうための改元で、その儀は、大納言親房が上卿となって執行された。参仕の公卿は七人を数えることができる。左にその勘文案を挙げる。

文章博士行氏朝臣。

仁養。漢書曰。見上。天和。礼記。見上。

建正。周礼曰。乃施法。官府。而建其正。見上。

文章博士家倫朝臣。

永康。尚書。見上。文明。周易曰。文明以建。中正而能。君子正也。見上。貞久。周易。見上。

式部大輔藤範朝臣。

嘉福。漢書。被用。見上。嘉曆。唐書。見上。寛安。毛詩正義。見上。

貞正。周易正義曰。日月照臨之道。以貞正得一。見上。

式部権大輔在登卿。

文弘。唐書曰。条理古。文弘宜旧制。見上。唐曆。唐書。見上。康永。金樓子。見上。

大学頭家高朝臣。

天観。尚書正義。見上。建万。周易曰。建万國親諸侯。見上。文弘。晉書。見上。

この改元の儀の様子は『藤房卿記』並びに『継塵記』に見ることができる。

【藤房卿記】

四月廿六日。頭左大弁資房朝臣下年号勘文。次第見下。次定申。招頭弁奏人々定申之趣。帰出仰云。一同可定申。次可難申之由。源大納言示之。勘解由宰相申云。康曆者。如引文者康字周康王名也。先々有沙汰。不被用哉。於康永難者。次第可申所存。先可有康曆之沙汰哉。侍從中納言申云。次第強非可難申事。康曆字康王諡号也。誠可有其義歟。於嘉曆者。先度雖舉申。嘉字近例不快。又曆字同前。於康永者無其儀歟。藤房申云。康曆者康字雖為諡号。年号字用諡号字之条。非無先規。且文治文者文平也。是又非諡号哉。但康曆引文承成康之曆業云々。於此号者取康王曆歟。以康王曆為年号之条。不得其意。永康者異朝度々被用之。各非聖代。就中後漢桓帝永康元年有事。以彼号勘申之条不可然。康永者両字各順水之上。四穀不升謂之康。然則以水災可有飢饉之象哉。且去年有水難之聞。尤可被憚歟。嘉曆事。此両字釈皆以吉也。但此二字近例誠雖不快。延曆嘉祥以來。多以聖代元号也。凡或先儒之所撰。弃玉不举之字等也。向後若依一代之不快。永弃被其字者。末代之元号弥以難得歟。論

大功者不録小過。舉大美者不疵細瑕。然者被宥用此号之条。何事之有哉。藤中納言申云。永康者後漢桓帝。晋惠帝。後燕宝。秦孝惠帝等時被用者。皆以一兩年也。其上桓帝時号尤可被憚歟。於嘉曆者其积神妙也。尤可被用哉。源大納言申云。於康曆永康者不宜哉。康永事。穀梁伝文曰。穀不升謂之康云々。如宋書常雖用康字。非此字哉。如東宮切韻者歟字也。於嘉曆者。如周書文者。嘉者元之会也。凡年号字以元与曆字可為本意。然者嘉曆尤可宜也。侍從中納言又申云。康永二字有洪水之難哉。康保永觀以來。多雖被用此兩字。朱聞水難之例。就中永治者（字）有二水三水之作。然而其時更無水災哉。強不可依水积哉。於嘉曆者。文曆嘉禎兩字猶可有議歟。藤房又申云。嘉曆事。文字文曆以後被用文応文永之号。至嘉曆字何可有其憚乎。勘解由宰相又申云。永曆者。後漢桓帝雖為有事之年。彼帝治廿余年。改延喜九年為永康元年云々。然者延喜雖為桓帝代末。本朝被通用之上。限永康不可有巨難哉。且唐太宗貞觀廿三年雖有事。清和天皇御宇被用之。尤可資準の哉。永治事。水积之由有其沙汰哉。是者治水之義也。如史記宋書者。夏禹左右足有水台二字。是則治字也。天降禹可令治水之瑞相也云々。於永治之准拠者。

異康永之会积哉。又此号引文魏明作康樂永休諸堂云々。取兩堂之一字為元号之条。理不可然之上。彼兩堂之吉凶又不詳哉。且又魏明帝非聖主。其性奢侈也云々。旁難被用哉。嘉曆事。嘉者元也。衆善之長也。此号誠可宜歟。此間次第取上文書。上卿取之令置前。次源大納言以官人又招資房朝臣。奏人々申詞。次資房朝臣退入奏聞。頃之婦出仰云。改正中三年為嘉曆元年云。依弘安元年例令作詔書云。（傍点是筆者、句点是『統群書類從』卷二百八十五による。）

#### 【繼塵記】

廿六日。庚子。晴。有炎氣。今夕改元定勘文。予尋取之。

引々文了見之。（中略）

酉剋向師興三条宿所。入夜着束帶参内。今夜改元定也。

於殿上与權中納言雜談。亥剋令參集。然而上卿源大納言

親房。祇候御前。此外侍從中納言。公明。勘解由宰相。惟繼等

祇候。年号字事。内々有沙汰云々。丑終剋人々起御前向仗

座。予。權中納言。大藏卿等起殿上。源大納言云。日来

可為文弘之由有沙汰歟。而字反不快。反崩。俄此沙汰出来。

重而於御前雖沙汰。可然字無之。然而嘉慶可被宥用歟

云々。予答云。可拳申彼字歟。大納言申云。尤可然。予心中所存此号不叶意。然而時宜無力歟。内々近年改元治定。返々不可然。然者有伏議。有何詮乎。源大納言。親房。

予。侍從中納言。公明。權中納言。藤原。大藏卿。冬定。勘解

由宰相推藏等。次第着左伏座。大炊御門大納言公賢。中宮大夫師賢申領狀。於臨期申子細。此外左大臣

大納言。右大臣同前。内大臣所勞故障云々。次頭弁資房朝臣於奥座。下勘文於源大納

言云。可有改元。定申也。上卿揖許。資房朝臣退去。源

大納言披見勘文之後。差遣予前。相互有氣色。予披見之。其儀如先々。

見了取笏氣色侍從中納言後。差遣勘文。次第見下了。於

勘解由宰相前披見了。任位次並置勘文。上卿仰云。誦申

也。宰相揖許。正笏申云。任位次可誦申歟。又以文章博

士可為先歟。上卿以文章博士可為先。宰相誦申之。先親

行朝臣。次家倫朝臣。次式部大輔。藤原。次式部權大輔。

在登。次大學頭家高朝臣誦申了。如元加懸紙結中。上卿

云。次第定申也。宰相揖許。

勘解由宰相。逃膝。

依可被改元。可被用何字乎事。式部大輔藤原朝臣勘申嘉

曆。文章博士家倫朝臣勘申永康等之間。可被計用。

大藏卿。逃膝。

改元可被何字乎事。用脫敷。式部大輔藤原朝臣勘申嘉元。權大輔

菅原朝臣勘申康曆等間。可被計用。

權中納言

年号字事。嘉曆永康等之間。可被計用歟。

侍從中納言。予。源大納言。

各定申旨同侍從中納言。其詞又同前。

定申了。勘文次第取上之。置上卿前。上卿召官人。

コナタ。官人跪端座溜下。上卿仰云。頭弁此方。官人稱唯退

入。小時資房朝臣來上卿座下。被仰下人々拳申趣。又反

進勘文。資房朝臣於内衛門下奏聞歟。勘文見下之間。震

儀内へ渡御此所。藏人清原兼酒被彼所。立台盤所御椅子。閑白被候。資房朝臣歸出。仰

上卿云。重有沙汰。可奏聞。

勘解由宰相申云。康永有水作。永字為二水。今年有水害

之難。不可被用歟。

權中納言申云。永康後漢桓帝号也。件年有事。更難被用

之。勘者若可有御罪科沙汰歟。

侍從中納言申云。康永事。康字強不可為水作。永字為佳

例。且先例永治。治字雖為水。水害難無之。凡於永康者

異朝度々例不快。更不可被用。嘉曆事。雖拳申度々例不

快。曆字懸意。康永引文雖不意行可被用乎。

予申云。永康事。異朝此号四々度歟。後漢桓帝。西晋惠

帝。北燕慕容氏又有此号。又有蠻夷之元号。更不可被用之。嘉曆雖舉申。嘉字為上事。嘉禎之後無之。甚難称佳例。康永水害之難。先例雖無之。就中永字為文永佳例。尤可被用歟。但為異朝人名。然而万寿文応雖人名被用了。有何事哉。

源大納言申云。永康事。異朝例為不快歟。於康永者。水害字不可有巨難。但嘉曆事尤可被用歟。嘉字嘉祥嘉承雖不快。嘉保嘉応為佳例。曆字延曆甚為規模。世俗難事。正慶度此号出現。人々結末由被談申之。仍予侍從中納言等申出之。不及沙汰歟。且非其音云々。

勘解由宰相重申云。永康事。舉申之處。面々有其難。不陳申者相似有若亡。異朝不快号。本朝佳例多之。仍舉申了。

源大納言重申云。嘉字元号尤有其便。周易云。元者善之長。亨者嘉之会也。不可有異議。

上卿以官人招頭弁奏聞。資房朝臣婦出云。改正中三年可為嘉曆元年。依弘安元年之例。令作詔書。上卿称唯移着端座。以官人令敷帑。次以官人召大内記。官人婦来申云。大内記不參。少内記所參也。上卿云。召戈。少内記紀景家參。上卿仰云。改正中三年可為嘉曆元年。任弘安元年例。令作詔書。景家称唯退去。即持參詔書草。上

卿披見。被称人々云。載踰年例由於詔書。此字不快歟。

予以下人々尤可然之由申之。上卿召筆。仰少内記被直。

先是權中納言大藏卿等退出。此後奏聞。被向弓場。予。侍從中納言。勘解

由宰相等早出。不見此事。于時卯終剋。及天明。(下略)

(傍点は筆者、句点は『統群書類從』卷二百八十八による。)

ここには、審議の円滑さとともに、親房の上卿としての手腕が認められ、さらに、親房が、康曆、永康、康永等の字を難じ、再度にわたって嘉曆字を主張し、これを押し切っている様子を詳細に認めることができる。まず、親房が康字を難とした根拠には、とくに『春秋穀梁伝』襄公二十有四年冬条「四穀不升謂之康」<sup>(18)</sup>を引いて凶作飢饉を示すものとしたことが注目される。一体にして、春秋三伝のうち『左氏伝』は、古来名文のほまれ高く、令制下大学寮の重要教科として採択された書物であるが、『穀梁伝』は『公羊伝』とともに採択されなかった。むしろ特殊視された書物であった。親房は、『左氏伝』に精通していたこと、その『正統記』の名分論、臣道論等はその反映として考えるむきが従来学者の大方の意見である。この改元の儀に、かの『穀梁伝』が引かれて康字批判の根拠とされている事実



は、親房の学識の広さと相まって極めて注意すべきことであると言わねばならぬ。次に、嘉暦字は、『唐書』より引かれた文字であるが、親房の嘉暦字主張の根拠は、ここでもことごとく易文であることを認めることができる。さて、その引かれた易文は、(イ)「嘉者元也。衆善之長也。」、(ロ)「元者善之長。亨者嘉之会也。」の二様であり、いずれも、群議中における親房の同一発言内容を示すものである。これは一見『周易文言伝』中の文辞を示すものと考えられる。(ロ)はたしかにその文言伝の第一節中の文辞であるが、(イ)は必ずしもそれと同一ではない。同一であるべきことがどうして異なったものとなったか。記録者が二人であること、従っていずれか一人、つまり藤房の明らかな記録違いによるものか。それとしては、「衆善之長也。」の「衆」は看過できない文辞なのである。この文辞は文言伝中の「元者善之長也。」についての程子注、つまり『易伝』中の文辞「元者衆善之首也。」に、また朱子注、つまり『周易本義』中の文辞「衆善之長也。」に相応するからである。<sup>(19)</sup>こうなると、(1)親房が文言伝を引いたにもかかわらず、藤房は全くの記録違いをしたのか、(2)藤房は、つねに『易伝』または『周易本義』を読んでいた

ために、親房の引文をそれと誤記してしまったのか、(3)逆に実任の全くの記録違いによるもので、親房は『易伝』あるいは『周易本義』も引いて発言したことになるのか、問題は簡単ではなくなるのである。しかし、少なくとも、(2)(3)の場合であるならば、これは、親房並びにその周辺の人々に対する程朱学の少なからざる影響をはっきりと示すものとなるであろう。ともあれ、親房と易との関係は別にとり上げて注目しなければならない問題であることを改めて確信する次第である。

#### (5) 嘉暦四年八月二十九日改元<sup>(20)</sup>

この改元の儀には勘文は、在登(康安、元和)、行氏(元徳、文安)、在淳(雍和、弘元、正永)から三通提出され、右大臣經忠、大納言親房ら八人の公卿が参仕し、元徳字が挙げられ、これに決定されるに至った事実を認めることができるのであるが、公卿群議の詳細と、親房の陳状の存する記録は今日見ることができない。

#### 〔註〕

(1) 『元秘抄』三。

(2) 『花園天皇宸記』、『改元宸記』、『冬定卿記』、『行類抄』。

『改元部類』、『伏見天皇宸記』。

(3) 『改元部類』。

(4) 『花園天皇宸記』、『改元宸記』、『師賢卿記』、『改元部類』。

『仗議定文』、『柳原家記錄』十九。

(5) 『仗議定文』、『柳原家記錄』十九。

諸道勘申今年辛酉當革命否又可被行何等事哉事  
運公

太政大臣定申云辛酉革命之曆運諸道勘奏之旨趣其說雖区分真偽  
難決歟遠檢漢室之典籍近窺和朝之文簿當其支干之年必慎徵祥之  
變凡五行之輪轉辛酉共為金位且計於未兆且察于無宜改号令被施

德化乎  
師信公

內大臣定申云諸道勘申三家所說四六二六之交入年數術數之不同  
綺皆以繆由旧貫疑難不及加新意縱相當其變美行聞天者非可驚縱  
不会其災政教背時者尤可恐哉偏不事變革可被施德化条々任外記  
之例可被量行但依元号之新古無禍福之去來者歟抑見師緒之勘文  
異先儒之著作物因准之義者頗以可謂非例歟而貫穿經伝涉獵和漢  
辛酉當革命之条非皇王之所序於墳典者闕其文本朝中古之碩儒參  
議清行朝臣遠術之余初之勘奏昌泰已後四百余廻逢此支幹已八ヶ  
度諸儒伝疑述疑群卿暗理譬理可謂只知厲其流未覺揚其源凡緯候  
之說非聖人之旨強拾彼狂誕不可補彝倫況所載昌泰勘文之緯文不  
詳云々然者辛酉革命之沙汰令勞儒術无益聖治歟向後可被停止哉

若猶可守株者清行朝臣之勘文後進可資準的歟以神武元年辛酉為  
部首不可交勘漢家之異說之由可被定下哉

定房卿

權大納言藤原朝臣定申云奉危天命者王者之法也而辛酉之年革命

之義經史之中未見其文占候前知之學君子不貴益此謂乎為革卦之  
氣變之旨雖載歷紀短慮之至要未得其義理然而任延喜以來之例  
可被定當否者四六二六之算勘陽乘陰乘之歷數說々之不同面々之  
注進凡上古和漢紹運之年紀疑殆多之共雖必定以神武天皇為部首  
之条清行朝臣勘文代々用來歟因茲今年不當厄運之趣諸道大略一  
揆歟抑案易象文明之彖民說之吾后為崇文之明主縱雖暨大變之期  
何恐時變哉況乎於不相當乎但安而不忘危者先哲之格言也纖芥之  
邪不載輟心殊本中和之德可被行王道之正乎謂道者修天理是也知  
道不被行者還可乖上天之玄鑒乎早改元号被修德化者聖運弥以長  
久民俗可哥康哉者乎

公藏卿

春宮大夫藤原朝臣定申云諸道文彼是不同短慮之了見弥雖易迷先  
揆神武入元之義者不當革命之条諸儒之所奏大略無異辛酉之年革  
命之運已雖儲三說輒難成一致歟然而本朝之沙汰起自昌泰清行朝  
臣之勘奏何闕日域根元之義可求漢國幽微之說哉此条康治以後議  
定事旧異加之我君即位之年相當戊午文王受命之運尤足規矩但猶  
居安慎危者君子之遺美也弥被施明德者定又有玄庇歟改元事每度  
蹤跡无由默止不依大變之期數就于一甲之元始可有沙汰哉自余事  
任外記之例可被量行此外勘文等子細人々被申歟重不能述愚意

夷香卿

大宰權師藤原朝臣定申云易詩歷紀之三說諸道勸文不一揆歟以黃帝之上元計之異朝之說猶多疑殆以本朝神武天皇為始者參議清行朝臣奏議已為濫觴依之違彼朝臣說之輩度々及勸問代々被弃捐畢以之思之今年辛酉不及大變之期歟居安不忘危者聖代之嘉模也况雖非大變之年必有徵天福善神懷祐宜被行花政可省民變災難自銷聖化弥久此上改元以下条々任外記勸例可被計行抑今度明經道勸文委細了見似有稽古之力相協聖代之条尤所可甘心也又就清行朝臣說有成疑之輩歟先達皆仰而取信未代輒議決矣

親房卿（實房卿）（本文に引用するに付き、ここでは略す）

前權大納言藤原朝臣定申云如諸道勸文者王鑒歷紀徑与靈夷年代曆年数參差之間勘奏区分之上易說詩說当否不同大變小變各微相異如參議清行朝臣之說者革變非今年所見已分明歟溫漢家之例以黃帝為上元勸本朝之例以神武為初首自天皇氏至于神農氏時代多相積自天津彦々火瓊々杵尊至于彦波瀲尊年紀難勝計其間何无辛酉甲子之曆其時不及上元初首之義者也抑易緯文事助教師緒疑難之趣非無子細彼緯十奏內其文不分明歟且天養元年甲子宇治左大臣為上卿參左仗之時此事被貽不審其趣見于後記然而先賢多以引此文後學輒難決其義情思緯候之書偏遠聖人之道和漢先蹤多所不用也橋原東人問十化歲數於吉備公彼公答云如此之義不足旁考考於古事則非史錄之史求於礼學則非礼經之疑聖人出世其意難測不可明知其緯書妄說運數其不經今一所不取也鄭玄皇甫謐顧野王既

無書可拠遂乃采合口伝以成六芸論等所說不一各相違背背正義之明說也何更致疑勞為此問哉云々先賢所為如此今儀弥可准拠哉而清行朝臣達術數之旨勘消息之義不知其術難測其意暗勞彼時々密奏已為魯代之定準每迎辛酉之支干頗有古今之勢（勢）遽就諸道之勘文及群卿之議定竊惑焉雖然宋高祖武皇帝永初辛酉祀南郊大赦梁高祖武皇帝大同七年辛酉赤祀南郊大赦村上天皇聖代康保元年甲子祭海若神後一条院明時治安元年辛酉修五大虛空藏法思此等之例非可無祈謝鼎耳雉呵之兆有妖不勝德之謂金門鳥敏之法叶可致治之義可久者賢人之德也可大者賢人之業也變化之道与四時相應聖人之所克行也人道之外依天之曆數更不可定吉凶之運天道非外依人事感應能被用文明之德歟偏施日新之德化被呈世治之功績者有何所畏哉依革命改元号之条我朝雖有昌泰以降之旧例異域異更無建元以後之先規縱雖改年号无其德者易民之聽耳從縱雖因旧号從其道者協天之意幸甚此上事任外記勸申可被計行哉師賢卿中宮權大夫藤原朝臣定申云諸道之推步皆師古革命之当否義非一揆或用曆紀經之術数會陽乘三變之運或拠契靈夷之年代当易詩同緯之說之由各雖令一同猶溫濫觴於昌泰近取節首於神武第二節第五四六之乘數未及然者今年可謂非革命之期爰先儒多置漢家之積年勘諸說之異同心和以後其來尚矣今度之義彼又如斯已存先蹤偏難弄指就中明經道之勘文引礼記正義春秋命歷序之說計其年数期則協尚書舜典伊訓等之心歟元久之年初勘此說弘長文永漸燭其義

(14)

然而諸卿加難勅問先舉世之不許以之可知但及覆而思之益古之  
義坦然而明白誰謂之幽言縱雖王筆之秘術不如仲尼之聖智縱雖靈  
爽之積年不可加穎達之博物用捨之處其理如何如彼年

(朱書)

冬定卿  
夾任卿

「參議彈正大弼藤原朝臣 大藏卿藤原朝臣 左大弁藤原朝臣

右定詞脫文

元亨元元成三

(6) 子曰、危者、安其位者也。亡者、保其存者也。亂者、有  
其治者也。是故君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘  
亂。是以身安而國家可保也。(下略)『易經』下、岩波  
文庫所収)

(7) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』第二編第六章北畠親  
房。平泉澄「愚管抄と神皇正統記」(『伝統』所収)、同  
「日本中興」(『建武中興』所収)、同「神皇正統記の内容」  
(『武士道の復活』所収)等。横井時男『北畠親房文書輯  
考』興國二年十二月項、その他。以上、いずれにも、  
『定文』における易論に言及された個所を見ない。

(8) ○鼎、元吉亨。

象曰、鼎、象也。以木巽火、亨飪也。聖人亨以享上帝、  
而大亨以養聖賢。(下略)

九三。鼎耳革、其行塞。雉膏不食。方雨虧悔。終吉。

○革、已日乃孚。元亨利貞。悔亡。

象曰、(中略)天地革而四時成、湯武革命、順乎天而庇  
乎人。革之時、大矣哉。

九四。悔亡。有孚改命、吉。

○既濟、亨小。利貞。初吉終亂。

象曰、水在火上既濟。君子以患思而豫防之。(以上『易  
經』下、岩波文庫所収)

○大有、元亨。

(9) 上九。自天祐之。吉无不利。(『易經』上、岩波文庫所収)  
太田昌二郎「北畠親房卿及び南朝の漢学に關する断章」  
(『北畠親房公の研究』所収)。

(10) 『神皇正統記』応神天皇条。

(11) 森克巳「日唐、日宋交通に於ける史書の輸入」(『本邦史  
学史論叢』上巻所収)。

(12) 『改元部類』。

(13) 同右。

(14) 元亨三年七月十九日条。

(15) 象曰、大有、柔得尊位、大中而上下應之、曰大有。其德  
剛健而文明、應乎天而時行。是以元亨。(『易經』上、岩  
波文庫所収)

(16) 『繼塵記』、『藤房卿記』、『改元部類』。

(17) 『改元部類』。

(18) 大饑、五穀不升為大饑、一穀不升謂之饑、二穀不升謂之饑、三穀不升謂之饑、四穀不升謂之饑、五穀不升謂之大饑、大饑之礼若食不兼味台榭不塗、弛侯廷道不除、此大饑之礼也。(四部備要『春秋穀梁伝注疏』より抄録した。)

(19) 文言曰、元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子体仁足以長人、嘉會足以合礼、利物足以和義、貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰、乾元亨利貞。(下略)

『伝』(前略)元者衆善之首也。亨者嘉美之會也。(下略)『本義』(前略)元者生物之始。天地之德莫先於此。故於時為春。於人則為仁。而衆善之長也。(下略)(『再刻易經集註』より抄録した。)

(20) 『繼塵記』、『改元部類』。

#### (四)

以上、小論は、前半生の親房がどのような足跡を残しているか、可能な限り、史料を博搜することをのめ目的としたものであったが、意外な記録に意外な事実をみ、ともすれば脱線し、いささかこれに論評を加え、推論に推論を重ねる仕儀と相成った。とくに親房の易についての知識は、後半生の親房の著述、そしてその思想構造を考える上に抜くべからざる点であることを喚起されるのである。親房の中国の学問思想についての知識は、津田左右吉氏をはじめとして多数の先学の論作において追究されていることは、事実であるが、易プロパーとの関係において親房の思想に言及した例は多しとしない。『神皇正統記』応神天皇の条に、「霜ヲ履堅氷ニ至ト云コトヲ、孔子釈シテノ給ハク、積善家ニ余慶アリ、積不善ノ家ニ余殃アリ云々。」は、周易坤卦初六と同文言伝を引いた文章であることは周知のところであるが、これをこれだけのこととして考えれば、その他に引用される多くの経書と同律に計られるに過ぎないこととなる。しかし、筆者は、『正統記』に展開される正理、徳の流動性、逆に歴史の流動性の中に正理の展開をみようとすると親房の姿勢とその論理構成いわば史観は、易とは無関係ではないと考え、従って易プロパーとの関係において親房の著作にもう一度光をあてねばならぬことを確信するのである。以上最後に感想を述べることとなったが、小論の目的はあくまでも前半生の親房の史料発掘をめざすことにのみとどまるものである。可能な限りの史料にあた

るべく所期したのであるが、勿論遺漏の点なしとしない。  
大方の御教示を乞うて閣筆する次第である。

〔註〕

(1) 「愚管抄及び神皇正統記に於ける支那の史学思想」(『本邦史学史論叢』上巻所収)。

(2) 『正統記』における天地開闢、国土生成論を『大極図説』との関係において論じた論著に足利衍述前掲書その他があり、中世の神道と親房との関係を重視し、神道とくに伊勢神道の成立に大きな影響を与えたものとして五行説、易理論があることを指摘し、この限りにおいて『正統記』に言及しているものに、山田孝雄「神皇正統記論」(『神皇正統記述義』所収)、同『神道思想史』、宮地直一『神道史』下巻一、久保田収『中世神道の研究』、平田俊春『元々集の研究』等その他がある。